

-r- を活用形に含む動詞時制形の 文法記述の改善に向けて

Perspective en vue d'améliorer la description grammaticale des tiroirs en -r-

平 嶋 里 珂
Rika Hirashima

Dans l'enseignement grammatical du FLE, il y a moins de matériel didactique sur les tiroirs en -r- (futur simple, futur antérieur, conditionnels présent et passé) que sur les tiroirs dits du passé comme l'imparfait et le passé composé. Il nous semble efficace d'élaborer une description grammaticale de ces tiroirs en -r- qui servira à l'enseignant de support didactique. La temporalité et la modalité de l'énoncé contenant un tiroir en -r- sont produites par l'interaction entre les valeurs aspectuelle et modale du tiroir, le sémantisme des autres constituants de l'énoncé tels que les procès et les adverbes, les caractéristiques syntaxiques et d'autres informations contextuelles. Les informations énonciatives concernant le rapport entre le locuteur et l'interlocuteur et les informations contextuelles ont souvent pour rôle de déterminer le sens de l'énoncé contenant un tiroir en -r-. Ces informations devront être explicitées dans la description de ces tiroirs afin que l'apprenant puisse saisir la situation énonciative sous-jacente au discours / textes.

キーワード

description grammaticale, valeurs modales, informations contextuelles, modalités

1. はじめに

外国語としてのフランス語教育 (=FLE) では、直説法複合過去形や半過去形などの過去時制に関して様々な言語学情報が教授法や教材開発に活用されているが、それ以外の動詞時制形に関する研究は多いとは言えない。本稿は直説法単純未来形、条件法現在形およびそれぞれの複合形である直説法前未来形、条件法過去形の文法学習を改善する基盤作りとして、言語学情報を活用した文法記述作成のための基本方針と今後の展望を描くことを目的とする。日本語を第一言語とする FLE の学習者が、身近なコミュニケーションの場面で、これらの動詞活用形を適確に運用する一助となる文法記述を構築するために必要な視点を明らかにするのがねらいで

ある。

2. -r- を活用形に含む動詞時制形の価値と用法

2.1. 条件法の問題

本稿で扱う4つの時制形は直説法と条件法という2種類の叙法に属するものとされている。叙法とは「叙述の内容に対する話者の心的態度を示す動詞の形態」(朝倉 2002: 307)であり、大きく人称法と非人称法に分かれる。非人称法には人称に応じた動詞変化を行わない不定詞と分詞が含まれ、動詞の人称変化を行う直説法、条件法、命令法、接続法が人称法に分類される¹⁾。従来の文法解釈では、人称法の内、直説法は「(…)何らの仮説的条件なしに、また客観的事実であると否とを問わず、話者が自分の判断をそのまま述べるときの動詞形態」(目黒 2000: 219)とされ、条件法は「仮説的条件のもとで実現するかもしれない行為またはたんなる可能性・推測など話者の想像を述べる動詞形態」(目黒 *ibid.*)のように定義される。日本語を第一言語とする学習者が使用する一般的なフランス語の文法書は同様の定義にしたがって動詞時制形を分類している。

しかしながら、条件法については独立した叙法と認定すべきか否か長い間議論が行われてきた。条件法の名称は16世紀にPalsgraveによって造語された。本来は条件節で使用される動詞活用形を説明するものとして定義されていたが、Telles (1664)とD'Aisy (1674)が *-rait* の動詞活用形の名称に誤用し、19世紀における学校文法の普及とともにフランス語教育で広く使用されるようになった (Bena 2011: 105, 237)²⁾。

条件法の叙法としての独立性に対する疑義は18世紀から今日まで数多く出されている。例えばGrevisse & Goose (2016)は1)統語的な特徴が欠如、2)直説法単純未来形と入れ替え可能、3)統語的な共起性が直説法単純未来形と同じ、4)直説法単純未来形・前未来形も事柄の蓋然性を表す、5)直説法単純未来形と形態面で非常に類似点が多い、の5点を挙げ、条件法の叙法としての独立性を否定している (p. 1068)。紙面の都合上議論の歴史的推移³⁾は省くが、現在のフランス語の言語学研究では条件法を直説法に含める考え方が主流であり、条件法の名称は動詞活用形のラベルとして用られていると考えられる。国語としてのフランス語教育の文法用語でも「条件法」の名称が付いているが動詞活用形は直説法に分類すべきことが述べられており (*Grammaire du français-Terminologie grammaticale* 2020: 36)、前述の朝倉 (*ibid.*)も単なるレッテルとして名称を踏襲している。

前述のGrevisse et Goose (*ibid.*)の指摘にもあるように直説法単純未来形と単純未来形の語幹に半過去形の活用語尾をつないで形成される条件法が形態的に近いことは周知の事実であり、条件法現在形・過去形は直説法単純未来形・前未来形の変異体と考えるべきだろう。なお、Damourette et Pichon (1930-1950)に倣い、これ以後本稿の研究対象とする動詞時制形は *savoir*

の 2 人称複数形の活用で表す (ex. 直説法単純未来形 → *Saurez*)。

2.2. -r- を活用形に含む動詞時制形の価値

2.2.1. *Saurez* の価値

伝統文法では *Saurez* は「未来時」*Sauriez* は「過去時における未来」という時間的性質を表すと記述されているが、2つの動詞活用形には語調緩和等時間的性質の表示とは関わらない様々な叙法的用法がある。紙面の都合上それぞれの用法の詳細については省くが、形態的にも類似点のあるこの2つの動詞時制形の共通点と相違点は何であろうか？

一般的に直説法に属する動詞活用形は時間軸上に事柄を位置づける機能があると解釈される。「未来形」の名を掲げる *Saurez* は事柄が未来時に実現することを表すと定義され、動詞時制形システムを研究する大多数の言語学者⁴⁾はこの時間的価値から叙法的用法を説明しようとする。すなわち、*Saurez* や複合形の *Aurez-su* が現在あるいはこれまでに起こった事柄に対する推測 (ex. *Pierre est absent: il aura encore sa migraine /il aura encore manqué son train.*) を述べていても、発話時には不確かな (*il, avoir sa migraine*) (*il, avoir manqué son train*) という事柄の真偽が確認できるのは未来時であるという考えである。

語源的特徴と論理的分析から *Saurez* について直説法とは別の叙法を設けようとするものもある。Yvon (1953) は未来の事柄は常に不確定で、直説法の事柄を現実のものとしてありのままに伝えるという定義とは相いれないと考える。また、*Aurez-su* の助動詞 *azurez* にはラテン語の *habere* に含まれていた論理的必然性を表す意味が残っており、*Aurez-su* が表す事柄は、現在確認できる事実から論理的に必然の結果を導き出した結果だとする (Yvon *ibid.*: 170)⁵⁾。そこで彼は *Saurez* と *Sauriez* に対して推測法 (= *suppositif*) という叙法を想定し、事柄の実現可能性の強さに応じて *Saurez* を確実性の高い推測法 (= *suppositif probable*)、*Sauriez* を不確実な推測法 (= *suppositif incertain*) と命名している (Yvon *ibid.*: 169)。

Yvon ほど急進的ではないにせよ、Novakova (2001) は *Saurez* に本来的な強い叙法的性質を認めている。Novakova は本来的に叙法的性質を持つ *Saurez* の語源 (ガロ・ロマン期のラテン語の *cantare habeo*: pp. 40-51, p. 94)、一般言語学的視点に基づいた動詞活用形の時間的価値に関する疑義 (71-72)⁶⁾等を複合的に考察し、時間性 (= *Temporalité*) の表現にはいわゆる動詞時制形だけではなく発話を構成する様々な要素が関与していること (p. 39)、*Saurez* については時間的性質と叙法的性質はしばしば分かちがたく結びついていること (p. 100)、さらには、Yvon と同様に事柄の真偽が確認不可能であるがゆえに *Saurez* は叙法的であること (*ibid.*) を指摘する。Novakova 自身は *Saurez*, *Sauriez* を直説法に属する時制であるとする立場をくずしていないが、Benveniste (1966) の *Saurez* に関する表現⁷⁾から着想を得て、-r- を活用形に含むこの2つの動詞活用形に投影法 (= *projectif*) という下位区分を設けることが可能であると示唆している (Novakova, *ibid.*)。

2.2.2. *Sauriez* の価値

Abouda (2017) によれば、*Sauriez* の研究は大きく次の3つのアプローチに分かれている：

- ① 過去における未来という時間的価値から用法を説明しようとするアプローチ、
- ② non-actuel を表す *Saviez* のシステム上で *Sauriez* が基準点以降の事象を表すという解釈から用法を説明しようとするアプローチ、
- ③ ポリフォニー理論から説明しようとするアプローチである (p. 25)。

①の時間理論的アプローチは *Saurez* の叙法的解釈と同様の考え方にに基づき、過去の視点から可能な条件節を想定しながら *Sauriez* の発話を解釈する。例えば婉曲用法の *Je voudrais vous demander un service* には *s'il m'était permis* を補い考える。②のアプローチの基になる考えは Damourette & Pichon (*ibid.*) 等⁸⁾が主張する、*Saviez* の本質が *actuel* を表す *Savez* と対立する non-actuel の次元の中心を構成するという理論である。事柄の内容をそのまま述べる *actuel* に対し、non-actuel (あるいは *inactuel*) の次元で述べられる事柄は内容が弱められて表される。反実仮定の条件節の内容が *Saviez* で伝えられるのがその例である。*Actuel* の次元は *Savez*, *Avez-su*, *Saurez* で構成され、*Saviez* と同じ *-ait* の活用語尾を持つ *Aviez-su*, *Sauriez* は non-actuel の次元を構成する。*Sauriez* は non-actuel の中心となる *Saviez* の基準点以降に実現する事柄を示すと考えられる。③のポリフォニー理論は一つの文の中に複数の主体の声が存在し、話者はその複数の声を相手に聞かせながら発言するという視点で発話を分析する。*Sauriez*, *Auriez-su* を含む発話はしばしば言外にある状況を前提として述べられている。例えば話者が *J'aurais voulu vous voir* と発する時、「会えなかった」事実とそれに対する後ろめたさが前提にある。そこで事実をそのまま述べるのではなく、仮想世界において非現実の *Si l'occasion m'avait été donnée* を言外に想定して *J'aurais voulu vous voir* と起り得た事柄を述べることで間接的に「会えなかった」ことを伝えている。

これらのアプローチにはそれぞれ理論上の弱点があると Abouda は言う。①と②のアプローチは共に *Sauriez* に基準点以降の事柄を表す性質を認めているが、この性質があるがゆえに時間理論的アプローチでは遊戯の *Sauriez* (ex. [ままごとで] *On aurait une fillette.*) について、Non-actuel 理論的アプローチでは報道で多用される伝聞の *Sauriez* について整合性のある説明がつけにくい。ポリフォニー理論的アプローチは様々な用法の解釈に応用でき万能に思えるが、ポリフォニーの産出と動詞活用形の形態面との関連性が明らかにされていない (Abouda *ibid.*: 25-26)。

以上、*Saurez* と *Sauriez* の価値に対す主なの理論を紹介した。1970 年中盤以降の外国語としてのフランス語教育は理論的折衷主義を特徴としており、筆者も日本語を第一言語とする学習者に対する文法記述を作成するために有益な諸理論を活用する方針を取る。記述の大前提となるのは、*Saurez*, *Sauriez* の2つの動詞活用形の形態的特徴 (① *Saurez*: *-r-* を活用形に含む、② *Sauriez*: *-r-* と *-ait* を活用形に含む) とそれぞれの複合形 (① *aurez* が助動詞 + 過去

分詞、② *auriez* が助動詞 + 過去分詞) 表す価値が整合性を持って説明できるということである。この大前提に従い、*Saurez* と *Sauriez* およびそれぞれの複合形である *Aurez-su* と *Auriez-su* の用法の記述を行うための大まかな方針とこれらの動詞活用形の言語的価値を整理しておく。

- ラテン語の *habere* に由来する -r- の形態素は論理的必然性に基づいた推測を表す叙法的価値を表す
- *Saviez* の活用の特徴である -ait は事柄の意味を弱める non-actuel の価値を表す
- -ait の形態素の有無から *Saurez* は actuel の次元に、*Sauriez* は non-actuel の次元に属すと考えられる
- 複合形の価値は単純形の未完了アスペクト (= aspect non-accompl) に対して完了アスペクト (= aspect accompli) を表すことである⁹⁾。

このように考えると、本来的に叙法的価値を表す形態素を2つ備えた *Sauriez* が強い叙法性を表すのはもっともと言える。田中(2006)は伝聞の *Auriez-su* について、「この2つ (= non-actuel と non certain) の特性を持つ条件法であるからこそ (…)[伝聞]を表すことができるのである」(p. 120)と述べ、actuel に属する *Aurez-su* には伝聞を表すことができないとしている (ibid.)。また、同じ語調緩和を表す *Saurez* と *Sauriez* の違いについて non-actuel に属す *Sauriez* は「もし可能であれば」という前提を含意するため *Saurez* より一段と語調緩和の度合いが強くなるとしている (p. 121)。もちろん、*Saurez* と *Sauriez* の様々な用法の意味は -r- と -ait の形態素に由来する意味だけが影響しているわけではない。Novakova (ibid.) が動詞時制形と発話の関係について述べているように、これらの動詞活用形を含む発話の時間的、叙法的、アスペクト的性質等の意味は、動詞活用形、事行の意味内容、その他の補語および発話状況に関する言語内外の情報の総体によって産出されるのである¹⁰⁾。

2.3. *Saurez*, *Sauriez* およびその複合形の用法の解釈に関わる要素

本来的に叙法的性質を表す形態素を持つ *Saurez*, *Sauriez* およびその複合形には多岐にわたる叙法的用法が確認されている。ここでは頻繁に使われる主な用法の意味が生じる仕組みを見ていこう。

2.3.1. *Saurez*, *Aurez-su* を含む発話の用法

【時間的意味】

Saurez については未来時を示す時間表現や文脈、*Aurez-su* の場合、未来時の基準点の存在で未完了の意が明瞭になる (ex. *Paul partira dans 3 jours; Tu auras terminé avant midi?*)。

【叙法的意味】

① 語調緩和

この用法が確認されるのは発話の主語が1人称主語あるいは1人称と想定される *on* であり、*dire* 等の発言動詞や *avouer*, *demander*, *noter* 等の遂行動詞と結びついて使われる。発言することによって意味を成すこれらの動詞を *Saurez* で使うことにより断定を避け語調が緩和される (ex. *Je vous demanderai une bienveillance attention*, Grevisse & Goose, *ibid.*: 1193)。この用法は論述を基本にしたテキストでもしばしば現れる (ex. *On notera d'abord que le savoir du linguiste est un savoir élaboré dans des conditions déterminées de production et de transmission*. Beacco & Chevalier, 1998: 34)¹¹⁾。語調緩和の *Saurez* は *pouvoir* 等の補助動詞と共に使われることも多い (ex. *Tu pourras m'appeler ce soir?*)。 *pouvoir* が示す可能性の意味が *Saurez* で示されることによってさらに間接的に話者の希望を表すことができる。この他にも商人と客の間でのやりとりでは定型的に *Ce sera tout?* や *Ça vous fera 11 euros*. 等の語調緩和の文句が使われる。

② 意思

意思を表す *Saurez* の用法 (= *futur volitif*) は幅が広く、話者の希望が発話内容に反映されていることは共通しているが、その解釈は発話に含まれる文の要素や言語外の文脈情報によって様々に変化する。主語が1人称の場合、発話は話者が発話に示された事柄を実現する意思を表すものと解釈される (ex. *Je partirai tout de suite.*)。主語が2人称の場合、話者が論理的必然性の実現として望むのは、聞き手が発話の事柄を行うことであるが、この希望は強い命令、誘い、提案、懇願まで解釈が様々に変化する (Imbs 1960: 50-51)。

解釈を変化させる要因として事柄の内容、文脈情報、口調等考えられるが、*Saurez* で表す命令は命令法の命令と違い話者の意思は間接的にしか表せないことから、大久保 (2014) は話者と聞き手との言語外の関係性が発話の解釈に大きく影響すると指摘する (156-159)。大久保によれば、事柄の実現が聞き手にゆだねられていると理解される時、また、事柄の実現が聞き手の利益にかなっている場合、例えば道順を説明する *Tu traverseras le pont* のような発話は助言として受け取られる。事柄の実現が聞き手の利益に合わない場合、例えば喫煙している人に煙草を消すよう求める場合は *Saurez* を使って丁寧さを表すことはできない (**La fumée me dérange: vous éteindrez votre cigarette, s'il vous plaît, ibid.*: 159)。命令あるいは指示と理解される発話の主語が3人称の場合もある。医者が患者の親に薬の服用を指示する場合 (ex. *Elle prendra un quart de comprimé d'aspirine avant de s'endormir*)¹²⁾ 等がその例で、話者 (医師) は発話の主語である患者が薬の服用を実行することを願い、聞き手がそれを実現させようと思うことで、*Elle prendra...* の例文は間接的な命令や指示に受け取られるという (*ibid.*: 159-160)。絶対的の命令は話者と聞き手の上下関係を背景にして力を持つ話者が聞き手に事柄の実現を要求する。*Saurez* を含む発話では前述したように聞き手に直接事柄の実現を命じている

わけではないが、軍隊における上官の発言のように、聞き手が事柄の実現を望む話者の意思を拒めないものとして受け取られる時、絶対命令の意味が生じるのだという (ibid.: 161-162)。

③ 推測

Saurez を含む発話は現在の事柄に対する推量を表すとされるが、この用法は現代のフランス語では衰退しており、迂言法 (*devoir* + inf.) を用いることが多い (ex. *Pierre est absent. Il doit être malade*). Grevisse & Goose (ibid.) によれば、動詞 *être*, *avoir* は話し言葉で推量を表すとしている (ex. *Notre ami est absent: il aura encore sa migraine*. p. 1194)。さらに渡邊 (2014b) は推論を行うに足る論拠が発話中に述べられている場合に発話の容認度が高まると指摘し、Grevisse & Goose の例文で言えば、副詞 *encore* と所有形容詞 *sa* により友人が習慣的に頭痛を理由に欠席することがうかがえることで推論が可能になるという (p. 183)。一方、*Aurez-su* の推量用法は *Saurez* ほど制約がなく、新聞、雑誌、テレビの報道でも使われる (渡邊, 2014a: 45)。渡邊が紹介する Barceló et Bres (2006) の例文 *Vous l'aurez constaté c'est l'été indien en France*¹³⁾ は *Vous direz que vous l'avez constaté c'est l'été indien en France*. と言い換えることができ、ニュースキャスターと視聴者の間に疑似的な対話が成立し、視聴者の感想を先取りするために *Aurez-su* による推測が行われているからだという (渡邊, ibid.: 45-46)。間違い電話をかけてきた相手に *Monsieur, vous vous serez trompé de numéro* と告げるのも、話し手が聞き手が発するであろう発言 *Excusez-moi, Madame. Je me suis trompé de numéro* を先取りして推測として述べる例と言えるだろう。

2.3.2. *Sauriez, Auriez-su* を含む発話の用法

【時間的意味】

時制の一致を受ける従属節内あるいは自由関節話法の中で使われる *Mon oncle me disait qu'il aurait pris sa retraite à l'âge de 65 ans* という発話では、*Mon oncle disait* で表される過去の一時点から叔父の発言 (*J'aurai pris ma retraite à l'âge de 65 ans.*) が捉えなおされ、*aurait pris* は叔父が 65 歳になった時にはすでに退職していることを予測していたことを示している。

【叙法的意味】

① 「仮定」を前提とするもの

この用法の典型的な形式は *Si + Saviez / Aviez-su* による条件節 + *Sauriez / Auriez-su* による帰結節 (ex. *Si nous étions maintenant en 2019, nous pourrions voyager librement à l'étranger.*) であるが、条件節あるいは条件を表す節または句は次の要素によっても構成することができる：

- même si : ex. *Même si vous nous aidiez, nous ne pourrions pas terminer ce travail dans*

le délai;

- 副詞あるいは副詞句：ex. *Sans votre aide, je n'aurais pas pu supporter cette situation-là;*
- 分詞またはジェロンドイフ：ex. *En partant trois minutes plus tôt, tu n'aurais pas manqué ton train;*
- 不定詞句：ex. *A vous entendre parler, on vous croirait français;*
- 条件節の一部となる語句のみ：ex. *Un peu plus proche de la gare, cet appartement serait agréable à résider.*

以上の要素が条件節を構成する時、事柄は *Saviez* あるいは *Aviez-su* で示されるが、*Quand bien même* 等の仮定を表す譲歩節内や接続詞を伴わずに条件を表す文中では *Sauriez* あるいは *Auriez-su* が使われる (ex. *Nous serions à Paris, tout serait bien différent.*: 朝倉 (ibid.: 140) に引用された Anouilh の例)

条件節を伴う *Sauriez / Auriez-su* の用法について Haillet (2002) はこれらの活用形は「事行を話者の現実に統合されていないものとして表す」(p. 12) とする。*Sauriez / Auriez-su* が非現実の事柄を表している場合が典型的な例と言えるが、Imbs (ibid.) は *Si + Saviez / Aviez-su* による条件節 + *Sauriez / Auriez-su* による帰結節は必ずしも非現実を表すわけではなく、話者(書き手)は帰結節の *Sauriez / Auriez-su* が非現実を表すか実現可能な事柄を表すかの選択を聞き手(読み手)にゆだねなければならないと指摘している (p. 76)。確かに、メールや手紙に *Je serais très heureuse si je pouvais vous voir lors de mon voyage à Paris* と記載されていれば、*je serais très heureuse* は控えめに書き手の希望を述べたものと理解される。言語のレベルでは (*je, être très heureuse*) は non-actuel と予測で二重に発話時点から引き離されていると言えるが、語用論的なレベルでは、相手に事柄の実現をゆだねる形で間接的に希望を表明するやり方が、丁寧さあるいは(相手に対する)配慮として読み手に理解されると考えられる。

② 不確実な情報の伝達

報道文でよく使われる用法で確証がない事柄を述べる場合に使われる (ex. *Ils sont soupçonnés de complicité dans l'attentat. Ils auraient tenté de tuer l'officier le 15 décembre dernier.*, Abouda, ibid.: 17 より引用)。この用法は情報を伝達することを旨とした平叙文に現れ、話者以外の情報源から借用した内容を示し、したがって話者が責任を負わない不確かな情報であり、最終的にはその真偽を確認しなければならない一時的な内容と理解される¹⁴⁾。

③ 語調緩和

Sauriez, Auriez-su の語調緩和の意味は発話の主語が 1 人称と 2 人称の場合に生じる。使われる動詞は *dire* 等の発言動詞や *aimer, vouloir, désirer* 等の願望を表す動詞、*pouvoir, devoir, vouloir* のような補助動詞である。Imbs (ibid.) によれば *Sauriez* による希望を表す語調緩和

は常に条件節を補足して解釈することができる（ex. *Je désirerais - si vous le vouliez bien; j'aurais aimé - si vous ne vous y étiez pas opposé...*, *ibid.*: 126-127）。聞き手との間に仮想の現実を想定した上で、婉曲的に事柄の実現を予測するという形で話者は間接的に自分の希望を表明するという発話構造になる。この仮想の現実を想定できるのは前出の田中（*ibid.*）の指摘にあるように、*Sauriez* が non-actuel の性質を備えているためと思われる。

pouvoir 等の補助動詞と結びついた *Auriez-su* の発話は婉曲的に表された後悔、批判等を含意することがある。母親が息子に対して *Tu aurais pu être un peu plus gentil avec ton camarade* というやんわりとした批判を含む発言を行う前提には、現実起こった事柄 *Tu as été méchant* さらにはそれによって引き起こされた *Ton camarade a été triste / a pleuré / s'est fâché avec toi* のような事実がある。*Auriez-su* を含む発話は原則的には仮想世界において実現したかもしれない（すなわち実現しなかった）予測であるため、発話になんらかのニュアンスが含まれると理解される場合、現実の世界で起こった事柄に対する話者の判断が発話に反映されていると考えるのが自然である。すなわち話者は「友達には親切にしなければならない」というモラルに基づいて現実の世界で起こった事柄に対する否定的判断（ex. *Tu ne devais pas être méchant; Tu ne devais pas fâcher ton camarade*）を下し、*Tu aurais pu être un peu plus gentil avec ton camarade* という発言につながっている。このことは話者の否定的判断に準ずる内容の条件節を補うことで発話の意味が明瞭になることからわかる：*Tu aurais pu être un peu plus gentil si tu n'avais pas voulu fâcher ton camarade*。批判が婉曲的と感じられるのも、前提となる事柄に対する批判が発話に反映されることにより間接的に述べられているからであろう。

Abouda（*ibid.*）によればこれらの用法は①時間的価値を表すもの（*Sauriez* の内容は *aller + inf.* で言い換え可能）、②発話の他者性を表すもの（*Sauriez [+ Auriez-su]* を含む発話の内容は *Savez* あるいは *Avez-su* で書き換え *paraît-il* を添えることで言い換え可能）、③条件節を伴うものの3つのグループに大きく分類されるという（p. 21）。叙法的意味を表す用法のうち不確かな情報の伝達は②、仮定を伴う用法は③であることは明らかだが、語調緩和については②と③で意見が分かれるという（*ibid.*）。筆者の分析では条件節を補った解釈が自然であると思われる。

以上、*Saurez, Sauriez* およびそれぞれの複合形の主な用法の意味が生み出されるための発話状況を手短に見てきた。これらの動詞活用形を含む発話の用法は、動詞活用形が本来的に持つ意味に文のタイプ、主語の種類等の統語的要素、組み合わせる動詞の意味的要素、話者と聞き手の関係、前提としている言語外の実事や価値観等、様々な要素の意味が重なり合い絡み合うことによって生み出されている。

3. FLE の文法記述に必要な記述の視点

3.1. FLE の文法記述に関する基本的視点

前節で記した *Saurez*, *Sauriez* とその複合形の価値およびそれぞれの用法を構成する諸要素を、日本語を第一言語とするフランス語学習者を対象とした文法記述の中でどのように表すべきであろうか？

Beacco (2010) は FLE の授業における文法解説の質を保証するものとして学習者の理解しやすさ (= *interprétabilité*) と実用性 (= *opérationnalité*) をあげている (p. 205)。理解しやすさを促進する例として文法用語が一定していること、学習する文法要素の定義が比較や例えなど様々な形で言い換えて表されていること、図表等を援用して解説を記号的に表されていること、分かりやすい文脈で一般社会的にも理解できる例文が示されていること、言語事象の記述とその解釈とが区別されていることの5点を、実用性を促進する例としては、文法解説に採用する言語学記述の質とマニュアルとしての価値の2点を挙げている (205-206)。同様の視点に基づき、筆者は動詞時制形の機能を総合的に記述するための手順として、動詞活用形そのものの価値と発話の意味を段階的に記述すること、言語学的な価値はできる限り一般的な言葉で説明すること、主な用法の意味を産出に関わる発話中および文脈上の要素が明瞭になるように発話状況を解説すること、図や日本語訳などを援用して発話状況や発話の含意を明示することを提案した (Hirashima 2019ab, 2021)。

後節では、これらの基本方針の中でも特に発話の文脈と例文の分かりやすさについて、本稿の研究対象としている4つの動詞活用形の特性に関連して、対照分析的観点から日本語訳、類似の要素の使い分けおよび文脈情報に関する問題について述べることにする。

3.2. 対照分析的観点

2.3. で見た *Saurez*, *Sauriez* およびそれぞれの複合形の主な用法は日本語の言語体系ではどのように表現可能であろうか？日本語の-ル、-テイルは現在時と未来時の表現を区別しない。未来時を表す *Saurez* は-ルに時の表現あるいは言語内外の文脈情報で表すことができる (ex. *Ma sœur reviendra de son voyage d'affaire dans trois jours* [姉は三日後に出張から戻ります])。未来完了の *Aurez-su* のアスペクト的価値は-テイルで訳すことができる (ex. *Ma sœur sera revenue de son voyage d'affaire le 11 juin* [姉は6月11日には出張から戻っています])。天気予報や占いのような予測を含む未来時の発話の翻訳には推量表現の「～だろう (でしょう)」が使われる (ex. *Il fera beau demain* [明日は晴れでしょう])。

Saurez や *Sauriez* を含む発話が話者の意思、推測、事柄に対する疑念など叙法的ニュアンスを表す場合、日本語では動詞活用形に意思・計画の表現、様々な推量、伝聞、断定を避ける表現、接続助詞等を後続させて表すことが多い。典型的な例をいくつかあげよう：

- 「～つもり」(意思) : ex. *Je partirai demain matin* [明日朝出発するつもりです]
- 「～ようだ」(推量) : ex. *Monsieur, vous vous serez trompé de numéro* [(電話) 番号をお間違えのようですね]
- 「～らしい」(推量・伝聞) : ex. *Takeshi aurait eu un poste de professeur de français dans une école culinaire à Kobé* [タケシは神戸の料理学校でフランス語教師のポストを得たらしい]
- 「～ではないか(じゃないか)」(推測)¹⁵⁾ : ex. *Tu aurais pu être un peu plus gentil avec ton camarade* [お友達にもう少し優しくできたんじゃないかしら]
- 「～のに」(期待と反対を表す) : ex. *Si nous étions maintenant en 2019, nous pourrions voyager librement à l'étranger* [今が2019年だったら自由に外国を旅行できるのに]

この他、依頼を表す語調緩和の *Sauriez* は説明表現の「～のです(んです)」に接続助詞を加えた「～のですが(んですが)」で表すことが多い (ex. *Je serais très heureuse de vous voir pendant mon séjour à Paris* [パリ滞在中にお目にかかることができれば大変嬉しいのですが⁸⁾])。

いわゆる未来形の日本語訳は「～だろう(でしょう)」という印象があるが、上記の比較対照から分かるように、*Saurez, Sauriez* とそれぞれの複合形の用法の意味は日本語のシステムとの間に1対1の対応を作ることはできない。フランス語は動詞活用形+動詞の意味+言語内外の文脈情報 (ex. 主語の人称、文の種類、状況補語、話者と聞き手の関係、前提となる事実および認識) で様々なニュアンスを表すことができるが、日本語では言語内外の文脈情報を反映した異なる叙法的表現を用いるのが普通である。したがって、フランス語の発話の意味を伝えるためには、日本語による明快な状況説明と日本語訳を添えるのが望ましいと言える。

さらに、*Saurez* の意思用法の日本語への表し方には注意が必要である。2.3.1. で述べたように、意思用法には話者が発話の主語となる場合の他に2人称に対する命令と3人称に対する命令がある。フランス語では文中に話者が現れなくとも、動詞を *Saurez* に活用することで話者が文の主語に事柄を実行させたいことを間接的に表すことができるが (ex. *Vos parents vous accompagneront* [(子供たちに) お父さんお母さんに付き添ってもらってください])、日本語ではこれができない。この点について、大久保 (*ibid.*) は日本語の命令は話者と聞き手の関係が発話中に明示されなければならず、命令表現は意志動詞と共にしか使えないのに対し、フランス語はこのような制約がないことを指摘している (p. 166)。命令を表す発話中に話者と聞き手の存在が現れない3人称の命令の場合、日本語訳では「人称転換」¹⁶⁾ を行い3人称の主語に事柄を実行させる聞き手の存在を補足しなければならない (*ibid.*: 163)。命令の他にも、2人称を主語として日本語で無意志動詞に相当する *avoir* で約束を表す場合 (ex. *Ton coucher de soleil, tu l'auras*)¹⁷⁾、人称転換を行い発話中に現れない話者が聞き手に夕陽を見せてやると言い換える必要が出てくる (*ibid.*: 164-165)。

これらの注意点を踏まえ、*Saurez* の意思用法の例文に添える日本語訳は直訳と意識の二段階構成にする、日本語とフランス語の発想の違いに関する説明を補足する等の記述上の配慮が必要になるだろう。

3.3. 類似の役割を持つ要素の使い分け

Saurez については未来を表す類似表現例えば *aller + inf.* との使い分けがしばしば問題になる。一般的に *aller + inf.* は近い未来に事柄が実現し *Saurez* では事柄の実現はすぐには行われないと言われるが、両方が入れ替え可能な場合も多い (ex. *L'année prochaine, j'irai / je vais faire un stage en France.*)。Novakova (*ibid.*) は未来時の近さや遠さという印象は事柄に対する発話者の態度の違いから生じる二次的効果であると述べる (p. 270)。*aller + inf.* の文は発話現在を出発点としており、準動詞 *aller* の語彙的意味が表すように、発話者は現在を基点として未来時に行動を投影する (p. 60) のに対し、*Saurez* で表される事柄は発話現在からは切り離されて捉えられている (p. 269)。このことから *aller + inf.* で表される事柄は確実性が高く *Saurez* で表される事柄は実現性が低いとみなされ、発話者の事柄に対する参与の度合いとなって現れるという (*ibid.*)¹⁸⁾。

Saurez と *aller + inf.* の使い分けは現在の FLE の文法教育にも反映されている。Derible (2010) は *aller + inf.* と *Saurez* の違いを一貫性のあるテキスト構築に活かすことを提案しており、学習者に気づかせるポイントとして、発話現在に根ざす *aller + inf.* の文 (ex. *Je vais aller au parc cet après-midi*) の前後には *Savez* の文 (ex. *Qu'est-ce que tu fais aujourd'hui?*) か同じ *aller + inf.* の文 (ex. *Je vais m'y promener en famille*) を用いることが好ましく、*Saurez* の文は「2050年の世界はどんなだろう (= *Comment sera le monde en 2050?*)」のような未来時を指標として語られる文脈の中に入れられることを挙げている (p. 196)。六鹿 (2016) は *Saurez* と *aller + inf.* が入れ替えできない例として *Quand* に導かれる状況節 (*Saurez* のみ可能) や「現在の状況からそのまま何らかの事態に移行しそうである場合」(*aller + inf.* のみ可能) 等を挙げている (213-214)。*aller + inf.* を用いる文脈は「(今にも) …しそうだ」「まもなく…する」(p. 214) という日本語訳で表されており、添えられた例文 *Il va pleuvoir* に「(空が曇ってきたのを見て) 雨が降りそうだな」と使い分けの指標となる文脈状況を補った日本語訳をつけているのは大変興味深い。

本稿では *Saurez* と類似表現の使い分けの典型例を紹介したが、これ以外にも *Savez, devoir + inf., Sauriez* を含む発話の事柄は未来時に実現すると想定される場合がある。また叙法的用法のうち紙面の都合上扱えなかった憤慨の用法は *Saurez (+ Aurez-su)* と *Sauriez (+ Auriez-su)* に共通している。このような表現や用法についても言語学的分析に基づきそれぞれの表現や動詞活用形を用いる言語内外の指標を端的に提示することが重要になるだろう。

3.4. 用法の解釈と文脈情報の問題：推測を可能にする文脈情報と使用域

2.3.1. で渡邊（2014ab）の考察を紹介したように、*Saurez* の推測用法は動詞の種類だけではなく推測だけの習慣的事実がないと許容されないが、*Aurez-su* の推測用法には用いる動詞の種類等の語彙的制約が少ないと言われる。では *Aurez-su* を含む発話が推測を表すと理解される根拠とはどのようなものだろうか？また、推測の根拠となる事柄の性質を探るため、日本語を第一言語とする中級以上の FLE の学習者を対象とした、総合的なフランス語文法参考書に記載されている *Saurez* と *Aurez-su* の推測用法の例文¹⁹⁾ の容認度を、フランス語母語話者 3 名に判断してもらった²⁰⁾。リストの 11 文のうち *Saurez* の推測用法は 4 文（1～4）、*Aurez-su* の推測用法は 5 文（5～9）である。推測用法と比較するため語調緩和の *Aurez-su* の例文を 2 文加えた（10、11）。出典の文法参考書には「単純未来形（前過去形）が推測を表す」「語調緩和を表す」という説明文と日本語訳以外の説明は記載されていなかった。以下例文を記す：

1. On frappe à la porte: ce sera mon ami Paul.
2. Il ne vient pas: il aura encore un rhume.
3. J'ai trouvé ce beau cadeau sur le bureau: ce sera le cadeau d'une admiratrice²¹⁾
4. Il y a quelqu'un à la porte. Ce sera le facteur.
5. Il n'est pas encore là, il aura manqué le train.
6. Je n'ai pas mes lunettes, je les aurai oubliées.
7. Camille n'est pas là. Elle aura encore oublié notre rendez-vous.
8. J'ai le frisson; j'aurai pris un rhume.
9. Le train ne vient pas; il y aura eu un accident.
10. Vous aurez oublié de fermer la porte.
11. Vous vous serez trompé de date.

例文を一見して、日本語母語話者である筆者にはこれらの例文は口頭で発話されることを想定して作成されたものと思われたが、アンケートに協力してくれたフランス語母語話者の回答²²⁾ では、3 名とも *Saurez* の推測用法の例（1～4）は小説や戯曲のような文学作品の中に現れる文であると答えた。例文 1 についてはコンテキストが日常的なのに *Saurez* の使い方は文学的なのでリアルな文ではないという回答もあった。（文脈情報があれば）日常会話で使えるかもしれないと判断した回答者も、例 2 については *Saurez* よりも *Aurez-su* を使った *Il aura encore attrapé un rhume* の方が自然であるというコメントを添えていた。*Aurez-su* の推測用法の例（5～9）についても、例文として不自然な 8 を除いて²³⁾、文学的なテキストに現れるのが普通という判断が最も多かった。しかし、*Aurez-su* の推測用法は *Saurez* の推測用法よりも日常会話で使う許容性は高いようであった。*Aurez-su* を使って婉曲的に発言する例文 10、11 については文学的なテキストが相応しいという回答もあったが、文脈があれば日常会話で使用可能とする判断が推測用法より多かった。

Aurez-su の推測用法については興味深いコメントがいくつか見られた。例文9について1名の回答者から文の前半に *toujours* を加え *Le train ne vient toujours pas: il y aura eu un accident* にするとより自然であるというコメントがあった。*toujours* を加えると「普通なら来るべき列車が待っているのにまだ来ない」というニュアンスが例文に与えられる。この回答者は例文5についても自分が同じ状況で発言するのであれば *manquer le train* より *manquer son train* を使うことを示唆しており、「列車に乗り遅れることが頻繁に起こる」という文脈情報がある方が自然な理解になると考えているようであった。ちなみに例文中に所有形容詞と副詞の *encore* を含む7については、3名の回答者のうち2名がこのまま日常会話で使用可能、1名は文脈情報があれば日常会話で使用可能という判断を下している。回答者が3名のみであるため断言はできないが、*Aurez-su* の推測用法についても事柄が習慣化されていることが文脈情報として示されていると容認度が高まるのではないかと思われる。

回答に自由につけてもらったコメントには「昔は会話の中でこのような言い方をした経験もあるが今はあまり使われなと思う」「(このような使い方は) 聞いたことはあるが自分では使わない」という指摘があった。渡邊 (2019) は他のロマンス諸語と比較してフランス語では未来時制の使用範囲が狭く、他の言語では広範囲に使用される推論用法がフランス語の *Saurez* では使われなことを指摘しているが (p. 86)、フランス語母語話者の回答から *Aurez-su* の使用域は文学やメディアなどの書き言葉が中心で、口頭での運用はかなり限定されていることが推察される。*Saurez*, *Aurez-su* のみならず、記述する文法項目の使用域についての情報も調査する必要がありそうである。

コメントの中には「個人的には丁寧に話す時や確信がない事柄について話す時には条件法を使いたい」というものもあり、例文と同じ状況で *Saurez*, *Aurez-su* 以外の言い方をする例として *On frappe à la porte: ce serait déjà Paul?* (例文1について)、*Vous vous seriez trompé de date?* (例文11について) 等が挙げられていた。1つの状況に対して話者がコミュニケーションの方略として用いる言語要素の選択には個人差があることを示す例だが、これを敷衍して、文法要素の選択に一定の幅を持たせたスピーチアクトを作成することも、文法記述を FLE の教育に効果的に活用する一例になるのではないかと思われる。

4. おわりに

以上、*Saurez*, *Sauriez* およびそれぞれの複合形の記述の根幹をなす動詞活用形の価値と基本的な用法の意味の産出の仕組みの概略をまとめ、日本語を第一言語とする FLE の学習者を対象とした文法記述に不可欠な明確な文脈設定と分かりやすい例文作成のために、日仏比較対照、類似表現の使い分け、用法と使用域の問題を分析した。本稿で触れた種々の問題は以後の研究で掘り下げていかねばならないが、基本的な研究の方向性は明らかにできたのではないかと思

う。-r- を活用形に含む動詞時制形も活用形の意味、動詞あるいは事柄の意味、言語内外の文脈情報が総合されて文の表面で感じられる意味が生み出される点では、過去時制形と呼ばれる *Avez-su* や *Saviez* と同様の意味産出の仕組みを持っていると言える。さらに -r- を活用形に含む動詞時制形については、強い叙法的意味の産出にはしばしば言語外の情報（ex. 話者と聞き手の関係性、現実世界で起こった事柄に対する話者の価値判断）が関与すること、用法によっては使用域が限定されること、話者のコミュニケーション方略と強い関連性があること等の特徴がうかがえた。今後の研究においてはフランス語母語話者に対するアンケート等も活用してこれらの点を明確にする必要があると思われる。

注

- 1) 朝倉（2002）の分類による。朝倉自身は A. Meillet の *Linguistique historique et linguistique générale t.1*, Champion（1921）を参考しているようである。
- 2) *-rait* の活用形では Palsgrave の分類では「可能法（= potentiel mode）」に含められていた（Bena 2011: 105）。Telles（1664）と D'Aisy（1674）の内容については Bena（2011: 237）の注 138 に引用された J. Mertens（1968）*Contribution à l'étude de la terminologie grammaticale. La nomenclature du verbe chez les grammairiens français du XVIIe siècle*. Thèse de doctorat inédite de la faculté de philosophie et lettres de la K. U. L. による。
- 3) 条件法の叙法としての問題点は Bena（2011: 236-239）に簡潔にまとめられている。
- 4) 例えば Imbs（1960）, Martin（1981）, Wilmet（1997）などがあげられる。
- 5) Yvon は *Il aura manqué le train*. という発話は、予定の時間にいるべき文の主語が不在しているという事実から「乗るべき列車に乗らなかった」という論理的原因があると推論され、*Il doit avoir manqué le train* の意味で使われているという（Yvon 1953: 170）。
- 6) 大多数の言語において動詞活用形は時間的価値を与えるのが本来の機能ではないという見解について、Novakova は Creissels（1995）*Eléments de syntaxe générale*. Paris: PUF. pp. 170-171 を引用している。
- 7) Benveniste は *Saurez* が未来に現在を投影するものであり、命令、義務、確信など主観的態度を含蓄していると述べている。Benveniste（1966）: 245.
- 8) 田中（2006）によれば、Damourette & Pichon 以外に *Saviez* = non-actuel 説を主張している言語学者に Le Goffic, Touratier 等がいる。各理論の詳細は田中（*ibid.*: 63-66）参照。
- 9) フランス語動詞の複合形と単純形が完了アスペクト vs 未完了アスペクトを表す形態の特徴であることは、国語としてのフランス語教育の文法用語でも認められている。完了アスペクトの意味の詳細については本紀要に収められた Hirashima R.（2021）. *Problèmes terminologiques de la description des formes composées du français -à propos de la cohérence entre les dénominations des formes verbales et leurs valeurs*. pp. 21-23 を参照。
- 10) 筆者も *Avez-su* および動詞複合形を含む発話の意味の産出について Novakova と同じ見解である。Hirashima（2015）および Hirashima（2019b）参照。
- 11) Beacco J.-C & Chevalier J.-C（1988）: *Les rapports de la linguistique et de la didactique des langues*. Dans Lehmann D. (dir.): *La didactique des langues en face à face*, Hatier-Crédif, Paris:

31-48.

- 12) 大久保 (2014: 159) が紹介した Togeby (1982): *Grammaire française II: les Formes Personnelles du verbe*. Copenhagen: Akademisk Forlag, p. 389 の例文である。
- 13) Barceló et Bres (2006): *Les temps de l'indicatif*. p. 120 に記載の *La chaîne Info* のニュースキャスターの発言の例として渡邊 (2014a: 45) に紹介されたものである。
- 14) Abouda (2017) による Gosselin (2005) *Temporalité et modalité*. Bruxelles, Duculot-de Boeck. p. 175 の引用。
- 15) 凌 (2018: 52) は「～ではないか」が「知識や情報などを基に物事について多分そうであろうと推測」し「話し手は完全に確定ではないがそれを認めるほうに傾く」と定義している。
- 16) 「人称転換」は鷺見洋一 (2003): 『翻訳仏文法 (上)』筑摩書房, pp. 287-288 の言葉を大久保が引用したものである。
- 17) Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*.
- 18) Novakova は例として Leeman-Bouix (1994: 162) の「選挙前に *Il y a des problèmes, on s'en occupera* という政治家より *Il y a des problèmes, on va s'en occuper* とする政治家の方が問題解決に参画している」を紹介している。
- 19) 例文は目黒 (2000)、町田 (2015)、六鹿 (2016) に記載のものを借用した。
- 20) フランス語例文の容認度チェックについては Eddy Vandrom, Alexis D'Haucourt, Christine Timbert 永野の三氏に協力していただいた。貴重な情報をいただいたことに厚く御礼を申し上げる。
- 21) Riegel M., Pellat J.-C. et Rioul R. (2014). *Grammaire méthodique du français* (5^e édition). Presses Universitaires de France. からの引用。
- 22) それぞれの例文につき4つの選択肢 (a. 普通の会話で使える、b. 文脈情報があれば会話で使える、c. 文脈情報があっても使えない、d. 小説や戯曲の中であれば通じる) は複数選択可とした。また自由にコメントを付けてもらった。
- 23) 3名中2名は *J'ai le frisson* → *J'ai des frissons* であれば許容されると判断した。

参考文献

- Abouda L. (2017). LE CONDITIONNEL EN FRANÇAIS: statut, typologie des emplois et signifié en langue. *Cahier de lexicologie*, no. 111, 11-28.
- 朝倉季雄 (2002). 『新フランス語文法事典』, 東京: 白水社.
- Beacco J.-C. (2010). *La didactique de la grammaire dans l'enseignement du français et des langues*. Paris. Didier.
- Bena M. J. (2011). *Terminologie grammaticale et nomenclature des formes verbales*. Paris. LHarmattan.
- Benveniste E. (1966). *Problèmes de linguistique générale, 1*. Paris. Gallimard.
- Damourette J. et Pichon E. (1930-1950). *Des mots à la pensée. Essai de Grammaire de Langue française*. 7 vol. Paris. Editions d'Artrey.
- Deribe A. (2010). Favoriser un travail de discrimination sémantique chez les apprenants de FLE Une étude de cas: le futur proche et le futur simple. *Revue japonaise de didactique du français*, 5-1, 182-200.
- Grevisse M. & Goose A. (2016). *Le Bon Usage*, 16^e édition. Louvain-la-Neuve. De Boeck Supérieur.

- Haillet P.-P. (2002). *Le conditionnel en français: une approche polyphonique*, Gap: Ophrys.
- Hirashima R. (2015). Tendances actuelles de l'enseignement des temps du passé du français dans quelques méthodes de FLE: le cas du passé composé, *Revue japonaise de didactique du français*, 10, 28-44.
- Hirashima R. (2019a). Le recours à la langue première: outil opérationnel de la réflexion métalinguistique. *Revue japonaise de didactique du français*, 13, 20-36.
- Hirashima R. (2019b). Transposition des savoirs linguistiques et leur modalité de présentation en vue de l'enseignement du système verbal du français à des apprenants japonais: le cas du passé composé. *Revue japonaise de didactique du français*, 13, 166-180.
- Hirashima R. (2021). Problèmes terminologiques de la description des formes composées du français - à propos de la cohérence entre les dénominations des formes verbales et leurs valeurs. *Kansai University Journal of Foreign Language Studies*, 25, 15-33.
- Imbs P. (1960). *L'emploi des temps verbaux en français moderne. Essai de grammaire descriptive*. Paris. Klincksieck.
- 町田健 (2015). 『フランス語文法総解説』, 東京: 研究社.
- Maillard M. (1994-1995). Notes du cours de D.E.A: Grammaires contrastives (Sciences du langage: Linguistique générale et Didactique des langues). Université Stendhal-Grenoble III.
- Martin R. (1981). Le futur linguistique: temps linéaire ou temps ramifié? *Langages*, 64, 81-92.
- 目黒志門 (2000). 『現代フランス語広文典』, 東京: 白水社.
- Novakova I. (2001). *Sémantique du futur. Etude comparée français-bulgare*. Paris: L'Harmattan.
- 大久保伸子 (2014). 「単純未来形の意味用法 時制とモダリティを表す仕組み」『フランス語の最前線 2 【特集】時制』, 137-176. 東京: ひつじ書房.
- 六鹿豊 (2016). 『NHK 出版 これならわかるフランス語文法～入門から上級まで』, 東京: NHK 出版.
- 凌飛 (2018). 「「(の) ではないか」の各用法間の関係について」『専修国文』, 第 102 号, 41-62.
- 田中善英 (2006). 『フランス語における複合時制の文法』, 東京: 早美出版社.
- 渡邊淳也 (2014a). 「前未来形のモデルな用法について」『文藝言語研究言語篇』筑波大学 66, 35-56.
- 渡邊淳也 (2014b). 「叙想的時制, 叙想的アスペクトと認知モード」『フランス語の最前線 2 【特集】時制』, 177-213. 東京: ひつじ書房.
- 渡邊淳也 (2019). 「フランス語の条件法現在形・条件法過去形とロマンス諸語における対応形式の対照研究」『筑波大学フランス語フランス文学論集』, 第 34 号, 54-90.
- Wilmet M. (1997, 2^e éd. 1998). *Grammaire critique du français*. Paris-Louvain-la-Neuve. Hachette-Duculot.
- Yvon E. (1953). Étude de notre vocabulaire grammatical, *Le Français Moderne* 21, 247-262.